



TITLE:

# 正米相場と期米相場との異同関係

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

---

CITATION:

谷口, 吉彦. 正米相場と期米相場との異同関係. 経済論叢 1931, 32(3): 485-507

ISSUE DATE:

1931-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130007>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號三第

卷二十三第

行發日一月三年六和昭

(禁 轉 載)

## 論 叢

所得稅の不公平……………法學博士 神戶 正雄  
利子の形成について……………文學博士 高田 保馬  
數學的經濟學の論理的構造の批判……………文學博士 米田庄太郎

## 說 苑

正米相場と期米相場との異動關係……………經濟學士 谷口 吉彦  
金爲替準備に就いて……………經濟學士 松岡 孝兒  
アメリカ經濟の發達と移民の消長……………經濟學士 堀江 保藏  
獨逸<sup>中</sup>工業金融<sup>機關として</sup>の Industrieschaft……………經濟學士 楠見 一正

## 雜 錄

幕末の株仲間再興是非……………經濟學博士 本庄榮治郎  
明治初年に於ける侍階級の騷擾……………經濟學博士 黒 正 巖  
舊派統計學の一著作……………經濟學士 蜷 川 虎三  
日本都市年鑑を讀む……………經濟學博士 汐見 三郎

## 附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

# 正米相場と期米相場との異同關係

谷 口 吉 彦

## 目次

- 一、問題および方法
- 二、價位の問題
- 三、値鞘の動態
- 四、變動の様態
- 五、三變動の異同
- 六、結論

## 一、問題および方法

取引所における期米相場と、現物市場における正米相場とを比較研究することは、一方には米價に及ぼす取引所または投機業者の影響を明かにし、他方には社會の商業組織における取引所の地位を明かにする上に重要な問題である。この比較研究のうち、兩者の間に存する相關々係に就ては、すでに他の機會に明らかにし得たところである。それによれば、兩者の間には種々の意味における相關々係の存することを認めうるが、併しその相關々係は言ふまでもなく、完全なる（相關係數が<sup>1)</sup>または「一なる」相關々係ではない。

このことは何を意味するか？ 正米相場と期米相場とは、互に深き關聯の下に變動しながらも、併もその間に何等かの異なるものを有しつつ關聯せることを示すものに外ならぬ。そこで相關々係と相表裏する他の問題、即ち兩者の異同關係 (Differentiation) が問題となる。われ／＼がこゝ

1) 拙稿；正米相場と期米相場との相關々係(經濟論叢 XXXII, 1. p. 123—141)

に問題とするのは即ち是である。

異同關係は之を靜態的異同と動態的異同とに分ちて考へうる。こゝに靜態的とは、一定の時、一定の處における兩者の異同であり、動態的とは時間的經過における兩者の異同を意味する。從つて前者は一定の時處における兩者の價位上の異同であり、後者は兩者の變動上の異同である。もちろん價位上の異同そのものもまた時間的經過において變動しつゝあるから、之に動態的觀察を加ふることも可能であり重要であるが、それと兩者の別々の變動様態を比較觀察することゝは自ら別の問題である。

この研究に利用した材料は、第一圖表の材料の外は、すべてさきに相關々係の研究に利用したものと同じであるから、こゝには繰返し説明しない。<sup>2)</sup>

方法については、隨時に目的と材料とに従つて適當と思はるゝものを利用したが、たゞ變動様態の異同を明らかにする方法として考案したのは、Persons 教授の方法に暗示をうける點が多い。<sup>3)</sup>例へば兩者の趨勢變動を比較するためには、最小自乘法を利用し、循環變動を比較するためには、循環變動を Eliminate した右の趨勢値からの偏倚を利用し、季節變動を比較するためには、之を Eliminate した循環變動からの偏倚によつて比較する方法これである。<sup>4)</sup>この場合に標準偏倚および變化係數を利用するのは合理的であり、且つ有効であると考へられる。<sup>5)</sup>

## 二、價位の問題

2) 拙稿；正米相場と期米相場との相關々係(經濟論叢 XXXII, 1, p. 127—129)

3) W. M. Persons; Indices of General Business Conditions (1919).

4) 拙稿；米の卸賣相場と小賣相場との關係(經濟論叢 XXXI, 5, p. 77—82)

5) 汐見三郎博士著；統計學(昭和四年) p. 125—126

正米相場と期米相場とは、一定の時、一定の場所において、何れが高く何れが低いかの問題は、こゝに問題とする意味においては、姑く當限相場と正米相場との比較となる。何となれば中限および先限相場は一二ヶ月乃至二三ヶ月さきに受渡さるべき關係から、その間の米價變動を多分に織込んでゐるからである。之に反して當限賣買は、最長一ヶ月、最短では殆んど正米賣買と大差なく受渡さるべきものであるから、兩者の價位は最も接近すべき筈である。たゞこゝで問題となるのは賣買の對象物となる銘柄である。

こゝに利用した材料のうち、大阪および京都に關しては、兩相場の銘柄は完全に一致する。即ち大阪にあつては堂島取引所の標準米は攝津赤三等であり、正米相場もまた攝津赤三等を利用した。京都にあつても兩者はともに山城赤三等で一致する。たゞ東京市にあつては取引所の標準米は埼玉縣中米であり、正米相場として利用したのは、深川市場に出廻る代表銘柄の中米標準相場である。従つて兩者は完全に一致しない。取引所標準米よりも七十錢格下の千葉縣三等米は右の深川市場の代表銘柄の上米に屬し、八十錢格下の茨城縣四等米は深川市場の中米に屬するから、取引所標準米は深川中米よりも少くとも八十錢以上の格上物である。(註)

(註)取引所標準米の性質もまた、東西市場によつて異なる。東京の標準米『埼玉縣中米』なるものは、現物を決定してはゐるけれども、正米としては市中に一もなく、市中にあるものは『埼玉縣二等米、三等米』等である、標準米の『中米』はこの二つの中間に位して、格付表では前者は格上十錢、後者は格下五十錢となり、同格品は埼玉縣米には一つもない。之に反して大阪、京都にあつては、標準米は府縣の検査等級と一致し、同格品は市中に賣買される。府縣米検査の整備しつゝある今日では、東京の如く標準米を特別に設定するの不便を敢てする必要もないと考へられるが、その理由は明らかでない。





都 京											
一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
八〇、四	九〇、一	九〇、九	九三、七	九五、八	九六、九	九八、三	九八、九	九八、三	九八、三	九八、三	九八、三
八九、四	九一、八	九一、三	八四、七	八二、八	八六、二	八八、八	八三、九	八三、九	八九、八	八六、八	九〇、二
九四、六	九九、二	一〇〇、九	一〇一、〇	九九、二	九六、九	九一、六	九六、九	九一、七	九一、八	九七、七	九六、六
九五、五	九五、四	九二、六	九四、〇	八九、六	八六、五	九一、二	九七、七	九六、七	九三、七	八八、五	九三、二
九三、五	九〇、〇	九二、三	九三、一	九四、二	九五、三	九八、二	九八、二	九六、〇	九四、五	八九、八	九三、三
八九、八	九二、二	九五、三	九五、三	九五、九	九八、三	九八、二	九八、〇	九六、三	九五、〇	九二、九	九五、二
九四、九	九六、七	九八、一	九七、八	九六、七	九七、一	九三、三	八九、九	九〇、〇	八八、八	八三、八	九三、三
九五、二	九五、九	九七、一	九八、〇	九六、六	九七、九	九六、九	九八、二	一〇二、四	九七、六	九六、二	九七、二
九一、六	九一、一	九四、四	九四、四	九四、二	九四、二	九二、七	九三、七	九四、一	八九、三	八八、一	九二、九
九五、八	九六、九	九七、六	九四、八	九五、五	九七、七	九七、六	九七、六	九四、一	八八、一	八八、一	九六、六
九二、一	九四、〇	九四、一	九四、七	九四、一	九五、〇	九四、三	九五、二	九四、一	九三、五	九一、六	九四、〇
四、五	四、五	五、二	四、一	四、四	四、四	三、〇	四、七	六、三	三、六	五、一	二、三
四、九	三、三	五、五	四、三	四、七	四、六	三、二	四、九	六、七	三、九	五、六	二、四

※東京に於ける格付更正とは當限相場を一石につき八十錢格下げせるものである。

いま之を東京について見るに、當限の標準米は正米よりも八十錢以上の格上米なるに拘らず、相場は却つて正米よりも下廻る場合が多い。即ち前表一〇九ヶ月のうち三八ヶ月だけは當限高を示すが、その他の七一ヶ月は正米高を示し、横の年平均では十中の六、縦の月平均ではすべてが當限安を示してゐる。試みに兩者の格差を更正してみれば、横の年平均もまたすべてが當限安を



示し、總平均において三・五%の下鞘となる。

之を銘柄の一致せる大阪および京都について見るも、ことに著しく正米高、當限安の傾向が認められる。即ち前者は一一五ヶ月中の九ヶ月、後者は同じく六ヶ月だけは、例外的に當限高を示すが、その他はすべて正米高であり、横の年平均においても縦の月平均においても、唯一の例外をのぞいてすべて當限安を示し、總平均において前者は五・六%、後者は六・一%の下鞘を示してゐる。これによつてわれ／＼は明らかに正米高、當限安の一般的傾向を確認することが出来る。

三都市の特殊性もまた前表によつて認めることが出来る。當限安の程度は京都に最も強く、東京(格付更正によるも)に最も弱い。然るに標準偏倚および變化係數によりて見る時は、値鞘の年々の變動は、大阪において最大に、東京において最小である。八月以後の端境期には、米價の動搖と共に値鞘の動搖も亦甚だしく、この時期の標準偏倚および變化係數は、三都市ともに著しく大である。その中でも大阪におけるそれは著しく大であり、年々の動搖の最大なるを示してゐる。

然らば何故にかくの如く當限相場は正米相場に比し一般に下鞘を示すかといふに、それは要するに、同一商品に對する同一場所における同一時間の相場であるに拘らず、その賣買條件を異にするからである。

第一に、正米賣買は當日または翌日に現物の授受を行ふに反し、當限賣買にあつては現物受渡の完了は翌月四五日頃になるから、その間に最長三十餘日の相違がある。従つてこの期間に對する賣買證據金または委託證據金の利子だけ、當限相場の下鞘を示すべきことは當然である。この

時間的間隔はまた（その間における相場變動は上下相殺するとしても）受渡の不安等の如き將來に對する一般の危險を豫想せしめるから、こゝにも當限を安からしむる根據がある。然るに今もしこの時間的間隔が、兩者の相違する重大なる原因となつてゐるならば、この間隔の縮少するに従つて、即ち當限賣買が月初から月末に進むに従つて、兩者の鞘は次第に鞘寄せすべき筈である。かくて月末における當限相場は殆んど正米相場と相接近すべき筈である。然るに實際においてかゝる現象の起らないのは、即ちこの原因がさまで重要な力を有してゐないからであらう。

第二に、最も重要な原因と考へらるゝのは、取引所における代用米制度である。代用米の受渡は、格付表に従つて格下げされるけれども、この格下げは嚴密に之をその時々事情および個々の事情に一致せしめることは不可能であるから、渡方は各地の採算を試みて最も有利な代用米を渡さんとし、従つて受方は最も不利な受米をすることとなる。ことに當用米を受けんとする正米商にあつては、各自が當用に向ける米はほゞ限定されてゐるから、受米はその銘柄・等級のほゞ豫想さるゝ場合でなければ危険である。この場合でも實際に行はるゝ受米は、抽籤の結果として決定される。かゝる事情のために、當限にあつては、相場は標準米ではあつても、受渡する代用米は、極端には何を渡されるか判らない状態にある。之に反して正米賣買にあつては賣買の對象は特定されてゐないことはあつても、銘柄・等級は最初から確定してゐる。この相違即ち賣買履行の對象物の相違こそ、當限相場の一般的下鞘を現出せしめる重要な原因であると考へられる。

さて取引所における公定相場は、他の機會に論じたる如く、<sup>1)</sup> 少くとも一般米價に對する『標準性』をもたねばならぬ。この標準性には、一般米價の絶對的の高さを示す絶對的標準性と、單に米價變動の相對的標準性を示す相對的標準性とを考へらるゝが、相對的標準性に就ては既に論證せる如く、<sup>2)</sup> 可なりの程度に、ことに當限相場において最も強く之を認めることが出来る。こゝに問題とする兩者の價位の問題は、即ちこの絶對的標準性に關聯する。而してこゝに論證しえた如く、米價の絶對的の高さを示す標準性としては、取引所相場は未だ不十分であると言はねばならぬ。

今もし期米相場の絶對的標準性を高めんとすれば、之に對する方策は二つある。一は代用米の範圍ことに格下米の範圍を限定して、受渡米をして出来るだけ標準米に接近せしむる方策であり、二は標準米の選定をなすに當つて、實際に最も多く受渡さるゝ銘柄例へば朝鮮米を採り、之によつて標準米をして出来るだけ受渡米に接近せしむる方策である。これらは取引所政策論として重要な問題であるが、こゝではたゞ問題の暗示に止めてこれ以上詳論しない。

### 三、値鞘の動態

正米相場と當限相場との間におけるかくの如き價位の相違即ち値鞘が、時間的經過において如何なる變化を示しつゝあるかは、また別の問題である。第一に、この十年間の一般的趨勢として、兩者の鞘は縮少しつゝあるか又は擴大しつゝあるかは、前掲第一表により認めらるゝが如く、殆んど何等の傾向をも指摘し難い。第二に、兩者の鞘の季節的變動にはやゝ著しい一般的傾向を認

1) 拙稿；正米相場と期米相場との相關々係(經濟論叢 XXXII, I, p. 124)參照

2) 拙稿；同上(p. 133)參照

めうる。大阪および京都においては殊に著しく前半期に鞘は小さく且つ安定するが、後半期に擴大し且つ動搖する。従つて逆鞘は多く後半期に現はれる。前半期においては漸次に一月より六月まで鞘は遞減の傾向にあるが、後半では七月以後擴大し年末に近く縮少する。即ち米の端境期および出廻りを反映するものである。

更に興味ある問題として残るは、兩者の鞘が時間的經過において、如何にして訂正されて行くかの問題である。前掲第一表によつて明らかなる如く、兩者の比例は最高一・一六、〇より最低七・六、〇の間を動搖しながらも（大阪）、これ以上極端に擴大することなく、過大または過小の比例は常に訂正されつゝ進んである。然らばこの鞘寄せは、正米からの歩み寄りによるか、當限からの歩み寄りによるか、若くは兩者からの歩み寄りによるか？同様にまた兩者の鞘の擴大する場合にも、同じく三つの場合を想像しうるであらう。

さきに米の卸賣相場と小賣相場との關係を見たる場合に、同様の訂正が主として小賣相場の後れて追隨することによつて行はれつゝあることを確めた。<sup>1)</sup>即ち卸賣相場がまづ一定の方向に變動をつゞけて、兩者の値鞘が一定の程度以上または以下に達するときは、小賣相場はこの値鞘を訂正するために、自ら變動せねばならぬことを見た。然るに正米相場と當限相場とは、卸賣と小賣の如き縦の從屬關係になく、主として横の併立關係にあるから、同じ理論はこの場合にも適用しうるか疑はしい。

この關係はまた兩者の前後關係からも判斷しえない。われ／＼は先きに當限相場の先行的傾向、

1) 拙稿「米の卸賣相場と小賣相場との關係」(經濟論叢 XXXI, 5, p. 71—77.)

従つて公定相場の『指導性』を確めえたが、たとひ當限相場は正米相場よりも先行しつゝありとしても、鞘寄せは必ずしも正米相場の追隨によつて行はれるとは限らない。例へば當限が甚しく下鞘にある場合を假定し、當限が常に先きに騰貴し正米が常に後れて騰貴したりとするも、當限騰貴の程度が正米のそれよりも大なる場合には、鞘寄せは當限の歩み寄りによつて實現さるべく、同じ場合に當限がさきに下落し正米が後れて下落したりとするも、當限下落の程度が正米下落の程度に及ばざる時は、鞘寄せは正米の歩み寄りによつて實現される。要するに問題は前後の問題よりも寧ろ程度の問題であり、従つて後に論ずる所の兩者の變動様態の相違ことにその振幅の大小に關聯する。

鞘寄せの問題を直接に實證するためには、月平均の材料では不十分である。更に詳細なる日々の變動を觀察せねばならぬが、今こゝではたゞ京都市の材料によつて之をなしうるに過ぎない。(註一) いま昭和元年以來の日々の變動を示す第一圖表について見る時は、毎年一月より六月に至る前半期には、兩者の開きは殆んど一定して著しい動搖を見ない。小賣相場および卸賣相場についても、前半期には著しく安定してゐることは、さきに實證しえた所である。<sup>2)</sup> この米價安定期を通じて、兩者の鞘は緩漫に縮少される。この傾向は前掲第一表においても指摘さるゝ所であり、ことに大阪市において顯著に見られる。この鞘寄せはまた、主として當限相場の漸騰による歩み寄りによることも第一圖表から觀察される。

米價安定期を過ぎて後半の動搖期に入ると、早くも七月において鞘は漸次に變動して、多くの

1) 拙稿；正米相場と期米相場との相關々係(經濟論叢 XXXII, 1. p. 133—135)  
2) 拙稿；京都市における米の小賣相場に就て(經濟論叢 XXXI, 3. p. 105)參照

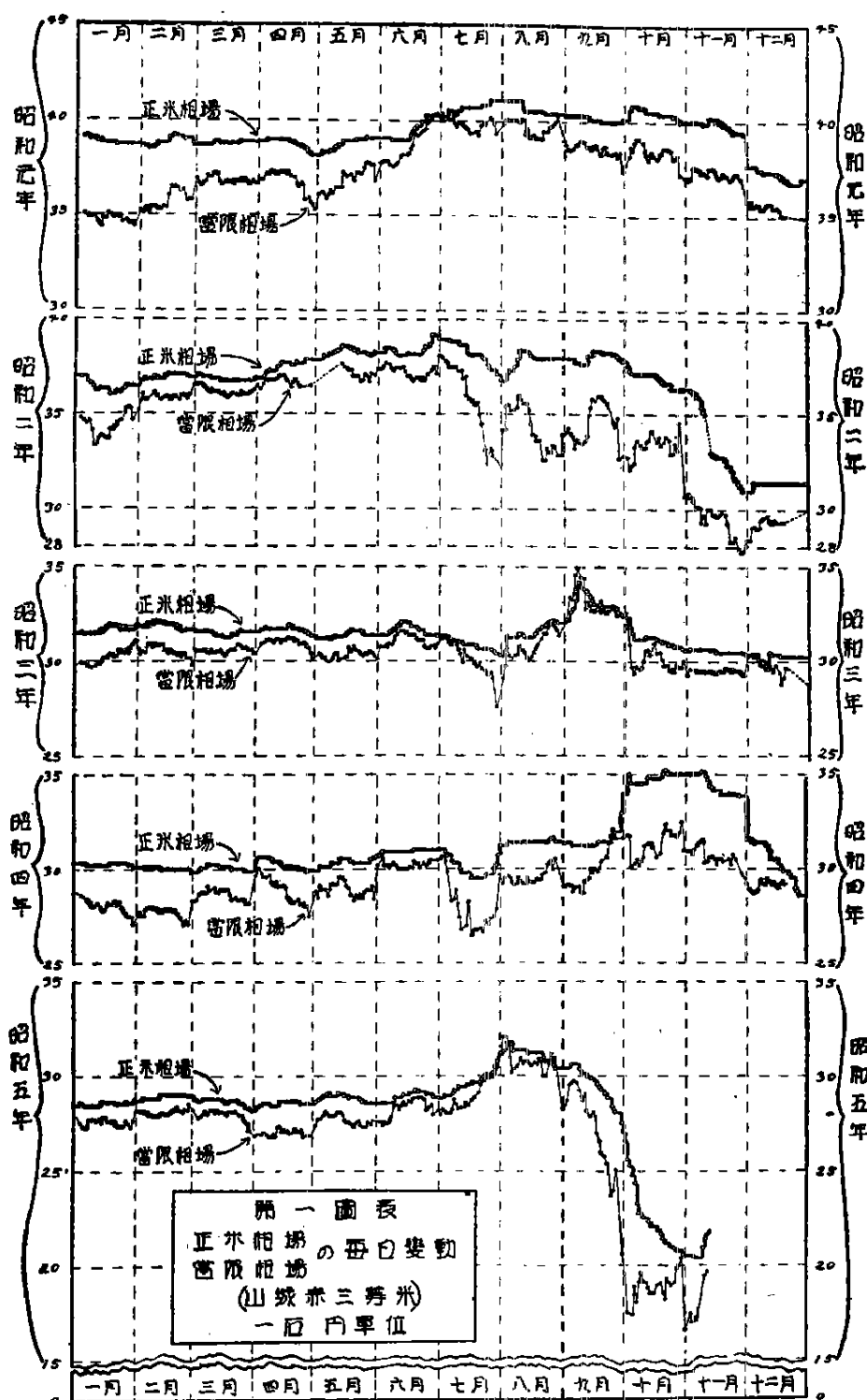
場合において、當限のより大なる下落により開きを擴大するのが常である。(昭和五年だけは) 却つて縮少する) それ以後の米價動搖期においては、米價の亂高下あると同じく、兩者の開きも甚だしく動搖し、却つて當限高、正米安の現象を呈することさへある。前掲第一表においても東京市をのぞき當限高の例外的事例はすべて後半に現はるゝこと既に指摘した所である。何れにしてもこの動搖は、十一月に入つて米價の安定すると共に安定し、且つ値鞘も次第に縮少して平靜なる状態に復しつゝ翌年前半の安定期に復歸する。この動搖期の前半における開きの擴大と後半におけるその縮少とは、何れの場合もあるが、當限の動きによる方が多い。要するに一年間の鞘の變動には正米によるもの、正米當限の兩者によるものもあるが、一般的には當限のより大なる變動による鞘寄せの結果として起る場合がむしろ多い。このことは後に論ずる當限の動搖性と正米の安定性との對應する。(註二)

(註一)第一圖表に利用した材料は前者とは全く異なる。正米相場は正米商大島辨三郎氏の發表する日々相場(山城赤三等)であり、當限相場は京都取引所の日々の相場引値である。相場引値を採つたのは、それが最も正米相場決定の時刻に接近するからに外ならぬ。相場引値の成立なき日はその最近節のものを採る。前者は大島氏備付の原簿により、後者は取引所の機關紙『京都經濟新報』による。

(註二)米價變動を研究するに當り、如何なる年度を採るべきかは早くより問題とされてゐる。米價と收穫高との關係を見るが如き場合には、謂ゆる米穀年度を用ふべき理由はあるが、すべての場合に之に據るべき理由はない。要は米價研究の目的により適當なる年度を採るべきであり、こゝに示せるが如く曆年度を用ふる場合にも、また興味ある觀察をなすことが出来る。

3) 山田中吾氏著；米價の研究  
木下茂氏；米價變動の統計的研究(國民經濟雜誌 XLV, 1-2)  
西澤基一氏；米穀統計資料(經濟時報 II, 5, p. 65-66)

第一圖表 正米相場および當限相場の毎日變動(山城赤三等、一石圓單位)



正米相場と期米相場との異同關係

#### 四、變動の樣態

正米相場と當限相場とのおの／＼の動態を比較するときは、大體において小賣相場と卸賣相場との異同に類する多くの事實を發見する。<sup>1)</sup>

第一に、變動の時間的頻度において、兩者は甚だしく異なる。正米相場は一日數回の變動をなすこともあるが、反對に數日にわたりて全く變動せざることも少くない。然るに當限相場にあつては市場の開かるゝ限りは、そこに賣買さるゝ節の數だけ、即ち東京では十五、大阪では十六、京都では十八回の變動を一日中に繰返しつゝある。従つて相場變動の頻繁なる點において、當限相場は到底正米相場の比ではない。このことは前掲第一圖表によつて、明瞭に觀察することができ、従つてこの意味における正米相場の安定性と當限相場の變動性とが、恰も小賣相場と卸賣相場（正米相場）との間に認められたと同様に認められる。

第二に、一回の變動の大きさを比較するに、正米相場は一石につき五錢づゝ刻むこともあり、また一回に數單位の動搖をなすこともあるが、多くの場合一石につき十錢を單位として動く。（但し平均の結果として現はるゝ統計上の計數は別である）。然るに期米相場は一石につき一錢の刻みである。勿論現實に一回の變動が何程なるかは別である。いま第一圖表について見る時は、兩相場の一回の變動には著しい相違を認め難い。然し乍らこの圖表の當限相場は毎日の前場引値を採つたに過ぎないから、圖表の正米相場はほぼ實際の動きを現はすに反し、當限相場は實は圖表の

1) 拙稿：米の卸賣相場と小賣相場との關係（經濟論叢 XXXI. 5, p. 75—77）



裏面になほ十七づゝの動きが隠されてゐる。換言せば圖表上の一點と一點との間は、更に通常十七の相場によつて連絡されてゐる。この事實を考慮する時は、一回の變動の大きさは當限相場において、より小さくなければならぬことを認めうるであらう。左にたゞその一例を示すために、京都取引所昭和五年十月二十日以後の一週間における當限各節の相場を示して、その前場引値および正米相場とを對照させる時は、この關係の一斑を知りうるであらう。

第二表 當限各節相場(京都取引所、一石圓單位)

昭和五年 十月二十四日	昭和五年 十月二十二日	昭和五年 十月二十日	相場	
			前場	後場
19.40	18.15	19.29	1	1
19.40	18.25	19.25	2	2
19.31	18.30	19.15	3	3
19.30	18.35	19.10	4	4
19.25	18.30	19.10	5	5
19.20	18.25	19.10	6	6
19.10	18.20	19.10	7	7
19.00	18.18	19.11	8	8
19.01	18.29	19.09	9	9
19.00	18.28	19.07	10	10
19.05	18.28	19.10	11	11
19.00	18.30	19.10	1	1
18.95	18.34	19.10	2	2
18.81	18.57	19.09	3	3
18.80	18.57	19.15	4	4
18.85	18.58	19.15	5	5
18.80	18.57	19.10	6	6
18.80	18.50	19.07	7	7
21.20	21.20	21.70	正米相場	
昭和五年 十月二十五日	昭和五年 十月二十三日	昭和五年 十月二十一日	相場	
			前場	後場
18.90	18.49	18.70	1	1
18.98	18.46	18.60	2	2
18.95	18.40	18.45	3	3
18.90	18.55	18.58	4	4
18.81	18.63	18.55	5	5
18.90	18.79	18.55	6	6
18.89	18.80	18.51	7	7
18.89	18.90	18.46	8	8
—	19.10	18.56	9	9
18.95	19.11	18.57	10	10
19.00	19.40	18.55	11	11
19.01	19.40	18.50	1	1
19.01	19.44	18.49	2	2
19.01	19.20	18.45	3	3
19.01	19.10	18.40	4	4
19.04	19.00	18.35	5	5
19.05	19.20	18.25	6	6
19.07	19.40	18.20	7	7
21.00	21.20	21.40	正米相場	

この表によつて明らかなる如く、今もし前場引値だけについて見る時は、その變動の幅は1.12、0.35、0.05であり、正米相場の變動の幅は0.30、0.20、0.20との間に著しい相違を認め難いけれども、前場引値相互の間には、更に十七節づゝの相場が介在して之を連絡するから、一回の變動は更に小刻みにされてゐることが判る。

第三に、右の二つの事實を綜合して、次の如く言ふことができる。當限相場は小刻みの變動を頻繁に繰り返すに反し、正米相場はやゝ大刻みの變動を時々繰り返す。即ち正米相場の安定性と期米相場の變動性は、この意味において先づ認められねばならぬ。こゝまでは先きに卸賣相場と小賣相場との關係について言ひ得たところと一致する。

然るに更にこれ以上に進んで卸賣相場と小賣相場につき言ひえた所は、今の場合には通用されない。それは二つの關係の性質上の相違より来る當然の結果である。第一に卸賣と小賣の場合に認めらるゝ前後關係は、同時に因果關係の存在を意味するに反し、正米と當限との間に存する前後關係は、單なる前後關係にすぎず、兩者は共に正米事情といふ共通の原因より来る二つの結果であり、たゞそれが期米相場により早く、正米相場にはやゝ後れて現はれ來るといふ相違にすぎない。固よりこの場合にも、兩者は全く別々に何等の關係なく現はれて來るものではない。正米相場は先づ現はるゝ期米相場を指標とし、その影響を受けながら正米事情を反映するものであり、こゝに期米相場の指導性を認める餘地を存するものではあるが、併しこのことは必ずしも兩者の間に因果關係を認むるものではない。

第二に、卸賣相場と小賣相場との間に存する値鞘は、小賣階段の獨立を認むる以上、絶對的に必要な存在である。従つてこの値鞘の限度を考ふることによつて、兩者の關係は説明し得らるゝのであるが、<sup>2)</sup> 正米相場と當限相場との値鞘は、現實には既に論ずる所の理由によつて存在するけれども、むしろ理想的には謂ゆる同一價格の原理によつて存在しえざるものである。従つて

1) 拙稿；米の卸賣相場と小賣相場との關係(經濟論叢 XXXI, 5, p. 77.)  
2) 拙稿；前掲論文 p. 77.

この値鞘の限度が作用して、かゝる関係を成立せしめてゐるものとは考へられない。この場合は要するに同一の共通原因によつて動き、同一事情を反映してゐるといふこと以外に説明しえない。たゞ變動の頻繁であると否との相違は、賣買の方法、對象、數量、相手方、條件等を異にするより來る結果であり、この點においては先きの場合と本質的に相違ありとは考へられぬ。従つてこゝでは姑く之を別問題とする。

## 五、三變動の異同

第一、季節變動　こゝでも季節變動そのものゝ研究は姑く別として、たゞ年々に繰り返さるゝ變動の様態において、正米相場と期米相場との間に、如何なる異同を認めうるかを問題とする。即ち問題を限定して、單に年内の變動において兩者の何れが大なる變動をなすかを見んとする。そのために先づ各相場に十二ヶ月の移動平均を施して、季節變動を Eliminate したる循環變動値（趨勢變動値を含む）を求め、これと現實數との標準偏倚を年別に比較することゝした。計算の結果は左表の如くなる。

第三表 季節變動における標準偏倚の比較

東京 〔正米相場の標準偏倚 當限相場の標準偏倚〕	大正										昭和	昭和	昭和	昭和	算術	標準	變化
	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	二年	三年	四年	平均	偏倚	係數	係數	係數	平均	偏倚	係數
三、八	四、九	二、七	二、〇	一、八	二、五	一、七	一、九	一、七	一、一	一、〇	二、〇	〇、九	四、〇	四、〇	二、三	一、〇	四、〇

大 阪		京 都	
正米相場の標準偏倚		正米相場の標準偏倚	
二、六	三、三	三、三	四、五
二、六	三、二	三、三	三、三
一、九	一、七	二、〇	一、八
一、五	一、七	一、九	二、六
一、九	二、六	一、九	二、七
一、四	一、九	一、五	一、九
一、五	一、七	一、七	一、八
一、二	一、〇	〇、九	一、〇
一、二	一、〇	一、七	一、二
一、八	二、二	二、〇	二、三
〇、五	一、一	〇、七	一、〇
二、七、八	五、〇、〇	三、五、〇	四、三、五

- 1) 昭和五年はたゞ一項につき省略する。  
2) 標準偏倚の標準偏倚である。

この表につき各年の標準偏倚を正米相場と當限相場と比較するとき、三都市を通じて一二の例外を除けば、當限相場のそれが常により大なることを認める。九年間の算術平均を見るも、當限相場において何れも偏倚は大である。このことは即ち年内の季節變動においては、正米相場に比し當限相場の方がより大なる振幅をもつて變動しつゝあることを實證する。正米相場の安定性と期米相場の變動性は、かくして前の場合とは異なる第二の意味において、こゝにも之を認めることが出来る。而してこの事實はまた、前に述べたる兩者の鞘寄せが主として當限相場の歩み寄りによつて現實されることと照應する。なほ右表の下方にある標準偏倚の標準偏倚および變化係數が、大阪および京都において著しく當限相場のより大なるは、季節變動の動搖の狀態が、年々によりて當限の方により大なる相違のあること、即ち第三の意味における正米相場の安定性と期米相場の變動性を實證するものである。

第二、循環變動 この十年間に米價が一回の循環變動をなしてゐること、および最初の五年間に上昇し後の五年間に下降してゐることは、さきに京都市に關して述べたる所と一致する。<sup>1)</sup>ま

1) 拙稿；京都市における米の小賣相場に就て(經濟論叢 XXXI, 3, p. 103)参照

たこの循環變動が正米にも期米にも略々同様に現はれてゐることに問題はない。こゝでわれわれが兩者の異同關係として問題とするのは、この循環變動において兩者は如何なる相違を示してゐるか？換言せば兩者の循環變動における振幅は、何れがより大か？従つて相場の安定性と變動性は何れに認めらるゝかの問題である。これを見るためにさきに算出したる十二ヶ月の移動平均値にもとづき、最小自乗法による直線を求め、この趨勢値からの各月の偏倚によつて十年間の標準偏倚を算出して兩者を比較することゝした。計算の結果は次の如くである。紙面の都合により計數はすべて省略する。

	東京	大阪	京都
正米相場の標準偏倚	三、六八	三、七九	三、七七
當限相場の標準偏倚	三、六五	三、四一	三、六〇

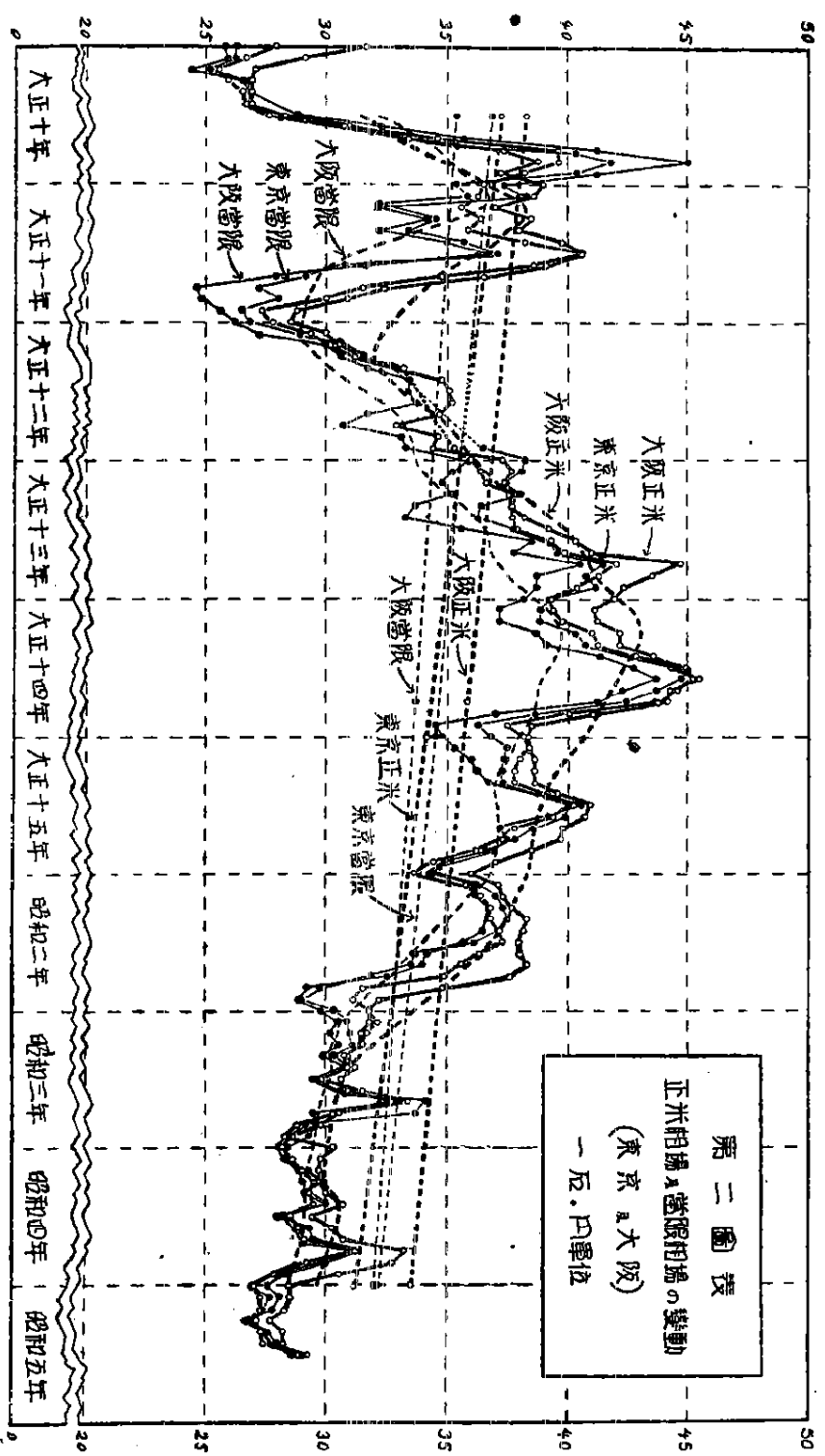
是に由れば第一に正米相場および當限相場は、三都市においてそれゝ略々接近した標準偏倚を示してゐる。このことは即ち米價の循環變動が、異なる場所においても略々同様に繰り返されつゝあること、即ち循環變動の一般性を實證する。第二に正米相場の標準偏倚を當限相場のそれと比較するときは、三都市を通じて、正米相場のそれがより大きい。換言せば循環變動においては、期米よりも正米の方が却つて大なる動搖をなすことを示す。即ちこゝでは却つて正米相場の變動性と期米相場の安定性が實證される。固より兩者の相違は前表に見らるゝ如く著しいものではないから、之をもつて直ちに安定性と變動性とを特徴づけるのは尙早であるかも知れない。たゞ併し之に由つて確實に言ひうることは、循環變動においては、他の既述の變動におけるが如き、

正米の安定性と期米の變動性とは、之を認めることは出来ないといふことは是である。このことは米の卸賣相場と小賣相場との關係においてもまた同様に認められる。小賣相場は多くの場合に卸賣相場よりも安定してゐるが、循環變動においては、兩者の安定性の相違を明らかに認められぬことは、既に他の<sup>2)</sup>機會に明らかにした所であつた。

第三、趨勢變動 大正十年以後の趨勢變動において、正米相場と當限相場との間に、何等かの相違を發見しうるか？之を見るために、最小自乘法による直線を比較する。いま直線方程式  $y = a + bx$  における  $a$  および  $b$  の値を比較すれば、それ<sup>3)</sup>次の如くである。

	東京 <sup>3)</sup>			大阪			京都		
	正米相場	當限相場	差	正米相場	當限相場	差	正米相場	當限相場	差
a =	34.1	34.5	0.4	35.9	33.7	2.2	36.3	34.0	2.3
b =	-0.0647	-0.0467	-0.0180	-0.0337	-0.0428	-0.0091	-0.0442	-0.0428	-0.0014
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....			.....		
	.....			.....					

第二圖表 正米相場及富限相場の變動(東京、大阪、一石圖單位)



る。ここでは圖表の都合により東京および大阪に関するもののみを掲出し、その原數、移動平均値および趨勢値を示す。但し移動平均値は大阪に関するもののみに限る。

## 六、結 語

正米相場と期米相場との異同關係

以上正米相場と期米相場との異同について實證しえた所を要約する。

(一) 兩者は同一場所における同一商品に對するほど同一時間の相場であるに拘らず、正米相場は期米相場に比し、常に高位を示してゐる。三都市は各々かゝる一般性を示しながらも、また多少の特殊性を示して、値鞘は東京において最小、京都において最大である。而してかゝる値鞘の存在する理由は、受渡時期の時間的相違によるよりも、むしろ代用米制度に伴ふ商品の物質的相違に原因するものと思はれる。

(二) 兩者の値開きは時間的經過において種々に變動する。最近十年間の趨勢および循環變動においては、著しい値鞘の變動は認められないが、年々の變動は顯著である。一般的には前半期に値鞘の變動少く、後半期に大なる動搖を示すが、そのうち前半期には主として當限の歩み寄りによる鞘寄せを生じ、後半期には之を一たん引離したる後、再び鞘寄せの現象を生じて翌年に入る傾向が強い。これらの鞘寄せ又は鞘離れは、當限の動きによつて實現される場合が多い。かゝる一般的傾向を示しながらも、三都市は各々多少の相違を示し、値鞘の年々の動搖は大阪において最大、東京において最小である。

(三) 變動の時間的頻度において、當限相場は正米相場に比し遙かに大である。前者は通常取引所における節の數だけ、即ち一日中に十數回の變動をなすに反し、後者は通常數日中に一回の變動をなすに過ぎない。之に反し一回の變動の大きさは、當限相場においてより小である。この二つの事實を綜合して次の如く言へる、當限相場は小刻みの變動を頻繁に繰返すに反し、正米相場は



やゝ大刻みの變動を時々繰返すものであると。

(四) 最近十年間の趨勢變動においては、兩者は共に微弱な漸落傾向を示し、その間に著しい相違を認め難い。またこの十年間における略々一回の循環變動においても、兩者の間に著しい異同を發見しえない。この二つの變動においては、むしろ正米相場において、僅かに大なる變動をさへ認められる。之に反して年々に繰り返される季節變動においては、當限相場において明らかにより大なる動搖をなしつつある。

(五) 兩者の何れが安定性に富み、何れが變動性を有するかは、右の如く變動の種類を異にするによつて異なる。第一に、單なる變動の回数より見る時は、正米相場はより安定してゐるが、一回の變動の大きさより見る時は、却つて當限相場が安定してゐると言へる。普通に考へらるゝが如く、この二つを綜合して、頻繁に小變動を繰り返すことをもつて安定を缺くとなすならば、正米相場の安定性と當限相場の變動性が認められる。第二に年々に繰り返さるゝ季節變動においては、何れの年においても當限相場の振幅はより大であるから、こゝでも正米相場の安定性と當限相場の變動性は認められる。第三にこの振幅の年々の相違もまた、當限相場においてより動搖するか、こゝでも正米相場の安定性が認められる。然るに十年間の趨勢および循環變動においては、反對に正米相場の變動性と期米相場の安定性を明示し難いまでも、少くとも正米相場の安定性を否定するには十分である。以上の諸關係のうちには、すでに當業者の長き經驗の結果として、知悉せるものもあるべく、或は然らざるものもあらう。たゞこの小論の試みは、これらの諸關係に一の數量的決定を與へんとするにあつた。(完)